

[COMMUNION]

WEB:http://www.nskk.org/

tokyo/index.html

E-mail:comm.tko@nskkn.org

PHONE:03-3433-0987

FAX:03-3433-8678

Diocese Office



日本の祈禱書

司祭 ダビデ 市原 信太郎

日本で聖公会の宣教師たちが活動を開始したごく初期から、聖書と祈禱書を日本語に翻訳する作業が熱心に行われていました。

その中で大きな働きを成したのは、アメリカ聖公会から日本へ派遣された宣教師のウイリアムズ主教（派遣当初は司祭）でした。ウイリアムズ主教は、最初アメリカより中国に派遣され伝道活動に従事した後、日本への転任を命じられました。そして、1859（安政6）年に長崎に上陸しましたが、当初はまだ鎖国中であり、日本人との接触は禁じられていましたので、一人日本語の習得に励んだようです。そのかいあって日本語はめきめき上達し、1862（文久2）年には最初の翻訳の仕事として、主祷文（主の祈り）、信条（使徒信経）、十戒を書籍の形にしたと本国に報告しています。その後も翻訳作業は続けられ、1875（明治8）年には祈禱書の大部分の翻訳が完了しました。

はしませんでした。というのは、当時の日本ではアメリカ聖公会

だけでなく、イギリス聖公会の伝道団体2団体（S.P.G・C.M.S）も活動しており、アメリカ聖公会とイギリス聖公会ではそれぞれに異なる独自の祈禱書を使用していたのです。ウイリアムズ

主教の翻訳はアメリカ版祈禱書に基づくものですが、イギリス系の宣教師達はイギリス版祈禱書の翻訳を進めていきました。ウ

イリアムズ主教は、日本の聖公会に2種類の祈禱書が存在することは好ましくないと考えたのでした。

ウイリアムズ主教は、共同で祈禱書を出版するという希望の元に自身の翻訳した祈禱書の出版を遅らせ、他の宣教師たちと話し合いを重ねましたが、いくつかの重要な点、ことに聖別禱が英米で異なっている点についてはなかなか合意が得られませんでした。イギリスの宣教師た



ちはイギリス版祈禱書の一部を独自に出版する用意を進めていましたが、ウイリアムズ主教の尽力によりようやく一致の方向に歩み寄り、早晚禱と嘆願（リタニー）は共通のものを準備し、聖餐式については宣教師合同協議会を開催してそこでの決定に委ねることにしました。

1878（明治11）年に開催された協議会において、合同で祈禱書を出版すること、そして重要な論点であった聖別禱についてはイギリス版を採用することが決議され、翌

1879（明治12）年に日本で初めての祈禱書として『聖公会禱文』が刊行されたのです。この祈禱書の成立は、自らの功績を放棄しても「日本の祈禱書」は一つということを大切にされた、ウイリアムズ主教の大きな働きの賜物に他なりません。

数年後、この祈禱書の内容を知ったアメリカ聖公会本局から「アメリカの諸宣教師は自国の聖別禱を使用する」ことを指示され、ウイリアムズ主教はこれを

付録の形で本文に追加しました。そして、日本聖公会組織成立後の議論を経て、1895（明治28）年に刊行された最初の公認祈禱書『日本聖公会祈禱書』では、聖別禱は第一、第二として英米

両方のものを採用し、陪餐後の感謝もこれに合わせた2種類が用意されるに至りました。こう

して、当時としては世界的にも珍しい、聖別禱を2種類持つ「日本の祈禱書」が誕生したのです。

この形式はその後も踏襲され、1939（昭和13）年版祈禱書まで続きました。

先だつての日本聖公会総会において、祈禱書改正という大事業の開始が決議されました。その草創期から、単なる母教会の祈禱書の翻訳ではない「日本の祈禱書」というテーマに取り組んできた歴史を持つ日本聖公会として、この改正を通してどのような「日本の祈禱書」を現代に示すことになるのでしょうか。

この大きな問いに応える大切な働きとして、日本聖公会全体で取り組まれることを願っています。（中部教区司祭、現在東京教区主教座聖堂付牧師、大森聖アグネス教会在住）

教会在住）

特集 信仰の先輩に聴く

今回は長く教会生活を送っておられるシニアの方々に、広報委員が所属教会を中心に、インタビューをいたしました。どなたも喜んでお答えくださったことが、印象に残りました。

あなたが教会に通うようになったきっかけはなんですか

● イギリスにいた子供時代、家族は教会には行っていなかったが、私は興味があり、近所のバプテイスト教会の日曜学校に通ったり、地元の聖公会の夕方のクラスに参加したりしていた。一つの教会が全ての答えを持っているとは感じられなかったので、様々な教派の教会を訪れた。教会以外の宗教の門をたたいたこともあった。こうして十代の頃から今まで、常に教会に参加し続けている。



● 立教女学院で学んだことがきっかけで洗礼を受けるようになったことも学校生活にあった。(若い時の教育は大切だと思う)結婚した相手が信徒ではなくても、教会に通うのが当たり前の生活だった。

トです。僕のルーツは、生粋の江戸っ子でホーリネスの熱心な信徒であった祖母(父方)から3代目です。僕自身は1936年横浜生まれで、疎開は祖母のいた秩父に寄留したので、お蔭でお祈りとか、集会・教会には抵抗なしに成長しました。

● 娘の立教女学院小学校へ入学がきっかけです。私はそれまでクリスマスチャンではありませんでしたから。女学院を選んだのは、学校が自宅から近かったからです。父母会で聖書研究会があり、ちょうど飢えた者が水を求めるように、聖書会に積極的に参加しました。チャプレンの導きもあり、マーガレット教会の礼拝に出席していました。

● 大学2年の時に友人に誘われて、はじめて教会に行きました。その頃は若い人たちが多くいたので、すぐに教会にとけこんだ記憶があります。

● 両親や祖父母がクリスマスチャンで、幼い頃から教会に行っていました。母が幼稚園の教師をしていた関係で、ただたらたらと通っていました。幼児洗礼も受けていましたが、とても

信仰などと言える思いを持っているわけはありません。

● 幼稚園に行ったのがきっかけです。ちょうど村岡花子さんなどと一緒に教団の教会に行きました。当時は、教会なんぞに行く者は怒られるといった時代でした。そして終戦後になって、ちゃんと教会に行くようになりました。

幼稚園がとっても良かった、子どもの讚美歌がとっても良かった。今でもよく覚えていますが、そして20歳の時に洗礼を受けました。

● 両親が信者だったので生まれた時に幼児洗礼を受けた。戦争が激しくなった時に一時的に教会に行けなかった時があった。地方に親の仕事の都合で引越しをしていた。伊賀上野の教会で堅信を受け高校3年生の時に東京へ戻ってきた。その後、教会生活を送っている。

● 小学校低学年の頃、近所の聖公会の教会の日曜学校に通ったこと。月に一度くらいでしたが、宣教師の方の熱心な働きも覚えています。

● 小さいころは日曜学校に行っていました。新婚の23歳の時、結婚して暮らす新居の隣に熱心なクリスマスチャンのご夫婦がいました。その方が聖公会の信徒の方でした。その方のお宅で開催されていた聖書研究会に参加するよう

になりました。ある年のクリスマス、家の近くの聖公会の教会に移籍するのが最初でした。日曜学校に行っていたこともあり、違和感はありませんでした。家庭的な15人くらいの教会でした。翌年に受洗、堅信を受けました。



あなたが教会にずっと来続けている理由はなんですか

● 一番の理由は、教会に出席しているうちに、そのことが自分の中で自然なこととなり、聖餐にあずかることが習慣化したからでしょう。

● 高校生の時に、GFSの東京支部が出来、初代のメンバーとして活動に参加した事が、大変大きな支えとなりました。また、英国留学中に訪れたクエーカーの教会が大変興味深く楽しかった事、親しくさせていただいたクリスマスチャンファミリーとの楽しい思い出の体験が、心に残っています。

● その当時教会には大勢子供がいたので日曜学校を12年間手伝いました。

ほかにオルターや愛餐会、婦人会、教委員会もやりました。

● 父親も小さい時から祖母に教会に連れて行かれ熱心なクリスマスチャンでしたが、自身は何処にも属さないと無教会派を通していました。勤務先に、月2回は講師や牧師を招いて日曜集会を開いてました。その手伝いが嫌で、逃げることを考えてましたから、近くの牧師がボーイスカウト隊長をしている聖公会の教会は格好の場所でした。ボーイスカウト仲間3人と一緒に受洗(松本聖十字教会)し、父の転勤で高3で家族と離れ教会伝道師と同居自炊生活をしながら伝道・礼拝・集会に参画し少年期の豊かな時を過ごしました。現役での大学受験は見事に失敗して東京での浪人生活のため上京し下宿先に近い三鷹伝道所を訪問し、日曜学校の奉仕を申し出ますが大学進学が優先と断われてしまいます。

以来、伝道所を運営されていたUご夫妻には大変お世話になり、就職の身元保証人・結婚の仲人役と養父母のよりに接して下さった。また卒業後の進路について悩んで神学校へ行こうかと相談した時は、『レイマンに徹しなさい』『それが貴方の仕事だ』と一喝されたのです。あの時代、U氏は自身し

イマン(一般信徒)に徹していながら篤志伝道師ともいえるお働きをなさっていました。東京での教会生活は三鷹伝道所の日曜学校教師から聖M教会での青年会活動・礼拝奉仕等から始まりました。

就職後、リストラ転職2回転勤5回国内各地を家族で引越し、教会も転籍しましたが各地での教会生活が大きな支えになり、いつも居場所と役割が用意されて今につながっています。



教会から離れたことはありませんか

● 一度だけ、教会の諸活動から身を引いたことがあった。会衆と牧師との間に問題が生じて信徒や家族が次々と教会を去ってしまった時期だ。しかし、礼拝への参加は欠かさなかった。これは重要なことだった。なぜなら、良い習慣は、習慣になるのは難しいが、やめるのは簡単だからだ。争いごとにはなるべく足を踏み入れないようにしつつ、霊的な健康のために、より落ち着いて礼拝とお祈りができる場を求め、教会以外の宗教的なグループに参

加することもあった。

● 教会に通えなかったのは、転勤で聖公会の教会がない地方に住んだ時とか、配偶者の看護で時間が取れなかった時です。

● 教会なんかに行きたくないと思っただことはありません。

● 教会大好きです。先生の祈りの真剣さに心打たれるし、親戚にもクリスマスチャンが多くいたので離れたことはありません。

あなたが教会の若い人たちに伝えたいことは

● 私にとって、教会のメンバーであるということの基盤は、イエス・キリストと聖霊の働きを通しての、私自身と神との結びつきにある。若い世代へ。もし迷いが生じて、心配しなくてよい。誠実な者は、時に疑い、迷うものだ。どのようにして良き友人となるか学びなさい。そしてさらに学び取るように続けなさい。あなたの信じるものとあなたの人生とが調和を保ち続けるようにしなさい。

● 最近思うことは、人間は自覚があるろうと、無かろうと、思いと言葉と行いで罪を犯しています。とても自分では償いきれないので、パンとぶどう酒で償い、養っていただいでいま



す。主日は、感謝と懺悔の気持ちで教会に来ています。体調を崩して入院したりすると、退院しても体力に自信がもてず、教会へ行こうとの気持ちになかなかたれません。それでも、つまずいたり、気分が乗らなかつたりで、教会に行かない日が続くと自分がダメになる、との思いがなければ教会生活は続きません。教会生活には、勇気と思いが切りが必要ですね。魅力があるから教会に来るのです。魅力とは、入院中に司祭が一人で来られたのですが、その司祭の背後に教会のいろいろな方の顔が見えました。実際の姿は見えないけれど、司祭と共にいる一人ひとりの顔に力づけられ、あと押しされたことです。

● 神さまは祈っていると応えてくださる。また、頼りたくなることがあるし、一人ぼっちじゃないので寂しくありません。

● 祈る事が大事です。

● 様々な疑問を持つと思うが、結局自分で勉強をして解決をしていくしか

ない。悩むことが自分の信仰を強くしていくと思えます。

● 若い方が、受け身では無く、しっかりと自立した信仰生活をおくるためにも、個（自己）を確立する為に必要なプログラムが有ると良いと思っております。

● 私が日曜学校を手伝っていたあの10年間は何だったんだろうかと思うことがあります。若い人が教会に集ってほしいし日曜学校が盛んになってほしいと願っています。



教会生活を過ごしてきてどうでしたか

● なんととはなく教会員生活を過ごしてきたと思う、教会に行くことは当たり前のこととしてすごしてきたが、「神の痛みの神学」北森嘉蔵著の本を読んだことによって、親から受けた信仰を固める事が出来たように感じている、様々な疑問を解決していかなければならないと思う。

教会に行っていてよかったと思ったことは

● 最初は私一人だったのに、主人と二人の子供の家族一人一人洗礼・堅信へと導かれたことです。今は仕事で離れています。そして主人をなくした時、教会があること、祈ることができるとがどれだけ助けになったことか。神様が「あなたは一人でも生活できるよ」と言ってくれたような気がします。

教会に来ていて一番うれしかったことは？

● ずっと、主人と一緒に礼拝に出たいと思っていましたので、主人が亡くなる3年前に洗礼を受けたことです。私は、主人が自分で納得して「洗礼を受けたい」との気持ちになって欲しい、そしてその時には教会のみなさんから祝福していただきたい、と思っていたので、主人の洗礼に関して私からは特に何も働きかけをせず、その時を待っていました。ですから、信徒と一緒に礼拝に出席できた時は、本当にうれしかったです。



● 「教会に来て、神様に直接お祈りできると感じられることが幸せ。聖公会で良かったと思っている」「子どもの世代が信仰に関心がないのが寂しい」とも。もうお一人は「今になって周り

教区再編成の動きについて思われること、次世代に伝えたいこと

● 聖職数の減少化を恐れ、教区再編

の人が皆立派に見え、求道者としてお祈りしている」と話されました。戦中戦後の長い人生の旅路を神様を忘れず歩んできた方たちだと感じました。

教会活動で最も力を注いだことは？

● 戦後、高校・大学生の頃は政治・社会・人々（人心）も騒然としていて、教会にいても政治・社会との関わりを非常に身近に感じて育った世代です。クリスチャンとして社会・政治を傍観しているのは許されないと考えました。1958年・岸政権下の警職法改正の動きに対して、同春秋には教会（所属の）青年会が独自に「反対声明文」を練り上げ、教区主教の了承をとり、全国聖公会青年会と沖繩青年会にも反対運動を働き掛けるなど、具体的な活動に臆することなく取組んだものです。

成と唱えて悲観的になり過ぎるのは何かと思う。且て、都心の教会が郊外に移るといったことは繰り返してはなりません。失ったものこれら確かな資産は2度と戻りません。むしろ、これらを活用し教会（礼拝堂・会館施設等）を社会に開き活用することこそ肝要です。今の世の中、ボランティア・グループ、NPO、あるいは趣味の活動です。これまで培った知識・経験を生かして地域に貢献したいとも思っている。催事会場や活動拠点として開かれた教会の空間を求めている。そういうニーズはあります。そのような活動のきっかけを作ることで、地域に渡っていくことも考えられる。

最後に、東京教区ほどの組織であれば、聖職と信徒の間、信徒の置かれる社会環境にあつて、多種多様な問題が起こるのが今のご時世。現代社会では、聖書、神学、教理だけでは解決出来ないこと（問題）は必ず起こる。組織内部で処理しようとせず、特に人と人の関係においては、教区（管区）は少なくとも、精神科医・臨床心理士（セラピスト）や社会・心理学者などの専門家（顧問）を置くことが望まれます。法的、あるいは会計上の手続きに、顧問弁護士・公認会計士などある種の専門家を頼むように。

司祭と語ろう（その18）

司祭 神崎 雄二

今回は月島聖公会牧師、葛飾茨十字教会（管理）、月島聖ルカ保育園と聖救主教会キッズスクール（チャプレン）の神崎雄二司祭に、月島の信徒の石田寿満さんと長島令子さんから



ご出身はどちらですか
神崎 兵庫県神崎郡神崎町です。

こども時代の育った環境、教会との出会い、印象などをお聞かせください

神崎 父親の仕事の都合で神崎郡から姫路市に引越しました。姫路市城下町の武家屋敷で鬼ごっこをしたり、よその家の屋根に上ったりして遊んでいました。その近くに聖公会の教会があったのです。戦後、教会に行くのが若い人達のブームになったことがあり、その時代に6人いた兄弟が上から順番に教会に行き出して、私も連れていかれました。

教会ではいたずらも沢山しましたが、とても牧師に愛されたという記憶があります。だから

居心地が良くてそのままずっと中学・高校・大学と続いたのです。

先生のお説教を聞いているとお母様が先生の人格形成に非常に大きな影響を与えていらっしやるようですね

神崎 そう、母親はどんなことがあっても裏切らないというか、否定しないというか、本当に私を深く愛してくれているという信頼が子ども心にとずっとありました。

学生時代はどうでしたか
神崎 高校生までずっと姫路に住んでいました。大学は、神戸松蔭女子学院大学に行きました。当時の八代斌助主教が自分の手元に神学校を置きたくて、松蔭女子学院大学にキリスト教学科を作ったのですが、そこでキリスト教を勉強しました。

卒業してすぐ聖公会神学院に行かれたのですか
神崎 大学を卒業する頃に八代主教が亡くなって、その後神学生をどのように教育していくかという方針が定まらない時期がありました。

「しようがないから神崎は修道院に入れておけ」というわけで神戸の聖使修士会という修道院で1年間勉強しました。それからようやく教区の方針が決まってこれからは聖公会神学院に行かないとだめだということになりました。

神学院での生活はどうでしたか？

神崎 「当然牧師になる」という意識は持ちながら、本気で勉強を始めると、自分には中身が伴わないと気づき、自信が持たず、酒を飲んで、神学生仲間と喧嘩ばかりしていましたね。

それは信仰的、神学的な食い違いからですか
神崎 いや、性格的なものですよ。私はキリスト教学科を卒業しています

から始めのうちは勉強しなくても適当に出来たので勉強をしませんでした。でもだんだん周りの神学生に抜かれていき劣等生になっていました。塚田先生に「君、勉強する気がないのだったら帰んなさい。君の年代の青年はみんな真面目に働いているんだ」と愛想をつかされた状態でした。

ある日、関田先生の説教の中で説教をつくらねばならない事態となりました。ところが自分がこんなひどい状態ですから牧師らしく話す内容がどうしても見つかりません。そんな中、当日の福音書の《中風の人を癒す》物語に出て来る中風の人が、一人で立ち上がれないでいる自分と重なってきたのです。



そして「イエスよ、俺の罪を赦すと言っても俺の周りの者は誰も赦してくれないんだ。だからおまえの救いは俺の救いにはならない」と言って説教台から降りました。その時はさすがに皆が黙りこみ批判もされませんでした。

ところがそれから3日ぐらい経ってからハッと気づいたのです。「これは逆だ」と。たしかに誰も赦してはくれない。けれどもイエスだけは赦してくださっている。誰が愛してくれなくても、イエスだけは愛してくださっている。それならば自分に生きよう」という方向に見方がひっくり返りました。

た。それは誰も私を評価しなくても母親だけは絶対に支えてくれるという愛の確信と繋がっていたのかもしれない。

また妻とも大学1年の時から出逢っていますが、彼女もまたものすごい忍耐力を持って私のいたらないところをじっと支えてくれました。私は自分で自分

を肯定できないにもかかわらず、母親と彼女とそしてイエスがどこかで繋がって私を支えてくれている、私が牧師を志し、一応それなりにやっていたのはそのおかげだと思っています。

オーストラリアの修道会やフィリピンに行かれた経緯を教えてください
神崎 中道淑夫主教から「これからアジアの時代だからフィリピンに行きなさい」と言われ、家族を置いてフィリピンに1年、オーストラリアに1年行きました。オーストラリアは修道院でしたがフィリピンは神学校で当時は全学年で150人も神学生がいました。

そのフィリピン時代の繋がりで、その後の毎年の活動をされているのですね、向こうではどのような活動をされているのですか
神崎 電気も水道もないような村の教会のコミュニティーに入れてもらって、信仰や生き方、人間関係を学びながら生活を共にするというのが中心です。でもただ飯をいただくわけにもいかないので植林や教会の屋根のペンキ塗りをお手伝いさせてもらっています。植林はもう何十年も続いているので山全体が木に覆われてしまったところもあります。

それが今もずっと続いている

私たちの教会 [23]

ようこそ神愛教会へ



少し質問をしてみました。
 〈神愛教会を一口で説明する
 としたら…、又その特色は…〉

・信徒があまり負担を感じない程度に一人ひとりが頑張れる教会。明るい礼拝堂、信徒が自立している。(59歳 男性) ・みんながお互いによく知っていて温

神愛教会・TODAY
 主日の受聖餐者が、20数名ほどの小さい教会です。7月に創立(伝道開始)110周年を迎えます。1906年、下谷万年町に播かれた種、関東大震災、東京大空襲など数々の試練を乗り越え、1998年(平成10年)に現在の聖堂が与えられました。最近JR日暮里駅、三河島駅近辺に、新築高層マンションが続出、休日など教会に隣接した児童公園は、若い親子でいっぱい、外国人親子も多く見かけます。教会の建物は、教会らしくない形でシンプル、礼拝堂と周辺道路が同じ平面なので外を歩く人から礼拝がまる見え、ガラス戸を開けると聖歌は外に流れます。

今回、教会員の方に書面で

歳 男性) ・キリストを中心とする緩やかなコミュニティ。一人ひとりが役割を担って楽しんで教会を支えている。(64歳 女性) ・帰る場所。お昼がおいしい。



かい教会。礼拝堂が明るく聖卓が近いので神様を近くに感じます。(17歳 女性)

・新しい人も気軽に入り込める教会。長い歴史があるが、特別な個性の強い人も無く、親しみやすい。(82

いありません。(信徒 津田 孚人)

・花を咲かせることが、いつかきつとできると信じて、教会員一同、共に歩んでいるに違

どんなことも受け入れることが出来る。(16歳 女性)

・ゆったりとした教会。みんなで参加する教会。(63歳 男性) ・神の愛を教会のメンバーが行い、この荒川の地に広めていく教会。地域と共に歩む(73歳 女性) ・下町の家族的な教会です。なじみやすいと他から言われます(50歳 女性)。

〈教会生活に満足していますか〉

・牧師や信徒と語る場がない

・平日も開いている教会づくりをして欲しい

・社会問題などについて、メンバー同士で話し合う機会が欲しい。

神愛教会の現在をある程度ご理解いただけましたか。神愛教会は、明るく、楽しく、希望がもてる教会と信徒の方は感じているようです。素晴らしい環境と使命を残してくださった神様と先輩のみなさまに感謝し、この地にあつてたくさんの実を結び、大きな花を咲かせることが、いつかきつとできると信じて、教会員一同、共に歩んでいるに違

ています。

聖書に書かれていることをよく咀嚼し、理解し、人に伝えること、それはより深く神に接することであると信じています。神の啓示と導きを願っています。

〈信徒リレーエッセイ〉
 三代目キリスト者の試練
 真光教会
 吉田 昌夫

最近多くの教会がそうであるように真光教会でも月1回の主日礼拝は「み言葉の礼拝」を行なうことになりました。その際は信徒が輪番で勧話を行ないますが、ケビン・シーバー管理司祭のご指示で担当者教会委員の中から出すことになり、勧話の内容はできるだけ当日の使徒書、福音書に関連するものとするようになりました。

私はすでに1回行ないましたが、私自身は三代目のクリスチャンで、御多分に漏れず、礼拝出席は欠かさずとも、聖書を自分で読んだり勉強することは怠けてばかりいる不熱心な信徒でした。勧話をするようになって、これは私に与えられた神様の試練だと思ふようになりました。

聖書に書かれていることをよく咀嚼し、理解し、人に伝えること、それはより深く神に接することであると信じています。神の啓示と導きを願っています。

ということが素晴らしいですね
 いろいろと月島の建築については難関がありました。去年辺りから少しずつ地域の人が教会に来はじめて実を結びつつあるような気がしています。先生はどう思われますか

神崎 保育園関係の活動もいろいろとやっていますが、それに来ている人達が教会にも来てくれるようになるという発想はしていませんし、してはいけないとも思っています。もちろん来てくださる方は大歓迎ですが、だから目に見えて信徒が増えるということもないでしょうが、可能性があるとすることはいつか思っています。

私はよく車の両輪に例えますが、歴史的に地域に大きな働きをしてきた保育園があつて、そして教会があります。そのように世の中との接点を持つた教会は普通の教会ではあまりありません。ですから「聖ルカこども村」や「月島キッズデイ」のように、その人達に教会が仕えるような働きができると考えています。こどもの保護者との交わりは親密ですが礼拝に来るということには必ずしも繋がりがありません。しかし日曜学校のほうには来てくれています。

先日、保護者と話をしている

宗教に凝りたくはないから礼拝には行きにくい。でもこどもが日曜学校で聞いた話を親にして、親もなるほどと思うことがあり、こどもも私達も思想的な影響を受けています」と言われました。

— そういう話が出来る雰囲気があるのはいいですね

先生は聖地にも度々行つていらつしやいますが、そのきつかけはなんですか

神崎 悩みの中にいた神学生時代に誘われてイスラエルに発掘に行つたのですが、その後、何十年も行くことができずに思いだけを持ち続けていました。その後、立教のチャプレンを首になつた時、今だと思つて2ヶ月間聖地の聖公会諸教会・諸施設を巡り、いろんな体験をして友達もたくさんできました。帰国後、その体験を報告した時に、パレスチナ問題を継続していく必要を感じて《エルサレム教区協働委員会》を始め、組織的にエルサレム教区と繋がっていきました。今はその委員会はありませんが、人間関係は続いています。

— 先生はフィリピンにしてもエルサレムにしても海外との関係を継続して活動されていますが

神崎 今の東京教区は海外との繋がりについてトーンダウンしているように感じています。聖

公会はともインターナショナルな教団であり、特に東京教区にはいろんな人が来るにもかかわらず海外諸教会との関係が薄くなつてしまつていいるのではないのでしょうか。国際関係部門を教区として作る必要があると思

います。

— 先生が説教でみんなに伝えたいとこだわつていらつしやる点についてお聞かせください

神崎 「聖書は何を言っているか」というのが基本です。書かれた当時の人達があの社会環境の中で何を伝えようとしたのかを把握して、その聖書のメッセージが今の現代社会の私達に何を語っているのかを、会衆の顔を思い浮かべながら具体的に現実的に身近な例をあげて語ることが心がけています。基本は神様が私達をどれほど愛しておられるか、赦しておられるかということに尽きますが。

— 先生が今後やりたいことは何でしょう

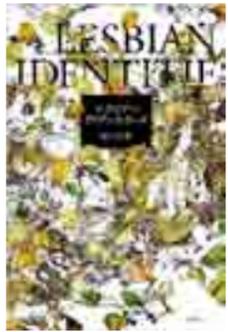
神崎 70才を超えたら退職してフィリピンの田舎で堆肥作りを組織的にやつてみたいと思つてます。それと妻を大事にすることです。

— それが今日の結論ですね(笑) どうもありがとうございます

「司祭の2の1番」
 レズビアン・
 アイデンティティーズ』
 堀江有里著
 洛北出版 2015年刊
 司祭 笹森 田鶴

アイデンティティは関係の中で形成されていきます。生涯の中で何度も確認し直し、再構築し、時には崩壊させられ、反対に積み上げられていきます。また変化の過程の中で、ひとつの言葉で表現しうる単純なものでもなく、いくつもの面や層によつて複雑に構成されています。人間がその人らしく生きていくことに、また自身の存在を喜び一杯に受け止めることに直結しているのがアイデンティティの形成です。

日本基督教団の牧師でもある堀江有里さんは、長くご自身がこだわつていらした「レズビアン」をめぐるアイデンティティについて、著作の中で丁寧に考察していきます。異性愛主義が当然であり、結婚という概念が固定化している日本の教会や社会では、マイノリ



ティであるが故に他者から認識されない状況に置かれ、存在していないかのように扱われます。一方、カミングアウトした途端にレズビアン代表者のようにみなされ、各人のイメージを勝手に押し付けられることで個別の人生を抹消されかねない状況にもなります。その限界を知りつつも、堀江有里さんは敢えてご自身の場所です。レズビアンという名を引き受け、名乗り、関係性の中に潜む境界線を越えていく可能性を模索してきます。領域で分け、誰かを除外して成り立っている教会や社会の構造の中で起こっている事態に目を背けることなく、忍耐強く果敢に越境を試みるのです。

女性で異性愛、そして教会が当然と考えている結婚観や社会の中の法的な制度を含む結婚への疑問を感じつつも、それでもひとつの規範を無意識に前提にしている自分の有り様を根底から揺さぶられる著作です。わたしはキリスト者としてどういった境界線を越える事ができるのでしょうか。

